

はじめに

責任編集 佐々木 宏夫

現在、日本経済は急速な変革の波にさらされており、それに伴ってさまざまな制度変革・制度創出の動きが活発である。しかしながら、その一方で、制度の特性や、構築された制度におけるプレイヤーたちの行動や誘因に対する深い配慮なしに制度構築が行われたならば、制度構築の目的にかなった適正な帰結を当該制度が生み出すとは限らないし、最悪の場合目的に背馳した結果が実現されてしまう恐れすらある。そこで、私たちは、私が研究代表者になって早稲田大学産業経営研究所のサーチプロジェクトの一つとして、「資源配分メカニズムの設計に関する理論的・実証的研究」を2005年度および2006年度の両年度にわたって遂行した。

この研究プロジェクトでは、資源配分メカニズムの設計に関して、理論的観点からその可能性と不可能性について分析すると共に、実証的観点から制度設計に関する評価を行うための枠組みを構築することを基本的な目的として2年間にわたり研究を遂行してきた。

このたびの『産業経営』の特集においては、このプロジェクトにかかわった者が当該プロジェクトで行った研究成果を基礎にして4つの論文を執筆している。

まず、佐々木・佐藤論文においては、近年行動経済学者や実験経済学者等によって指摘されている、伝統的経済理論では説明しきれない一見不合理に見える経済主体の行動について、合理性を否定することによってではなく、選好が定義されるドメインを拡大することによって、合理性に基づいて説明しうる枠組みを提起している。

坂野論文では、上記サーチプロジェクトで行った時系列モデルにおける統計的検定の検出力に関する研究に対して、実証研究のツールとして時系列モデルと並んで重要な重回帰モデルにおける誤差項の統計学的性質についての研究が行われている。

横溝論文では、貿易統計におけるHSコード分類(Harmonized Commodity Description and Coding System)に基づいて貿易される財貨を細分化した上での、細分化された財貨輸出入に関する弾力性を計測している。このような詳細にカテゴライズされた弾力性の推計は、国際貿易に関するより適切な制度設計を行うための基礎を与えるであろう。

最後に、阿武論文においては資源配分の公平性に関する静学的な観点からの論点整理をした上で、個人の価値判断がきわめて多様化している昨今の社会状況においては、公平性と効率性の実現可能性について大きな変動が生じている可能性があることが理論的に指摘されている。社会制度を設計するに際して「目的」をどう設定するかという問題はきわめて本質的であるが、とりわけ公平性については効率性と並んで深く考察されねばならない論点なので、その意味でも意義の

ある論文だといえる。

このようにこの特集に掲載された論文は、上述の研究プロジェクトの研究成果をさらに発展させたものであり、このプロジェクトなしにはこれらの論文は執筆できなかったであろう。このプロジェクトを遂行する機会を与えてくださった、早稲田大学産業経営研究所に心からの感謝を申し上げたい。